

演劇をめぐる伝承・伝統の意義と役割

～2つの「中断」を事例として

前田達朗

はじめに

本稿でとりあげるのは、奄美群島の2つの地点での芸能活動である。

本研究ではこれまでも、演劇が琉球（諸）語の維持・継承の手段たりうるかということの検討を続けてきたが、引き続き加計呂麻島・諸鈍の「諸鈍シバヤ」と与論の「方言劇」の事例について考える。なにをもって芸能あるいは演劇とするのかはここでは詳しく立ち入る必要はないと思うが、個人だけの娯楽ではなく、公に披露することを目的の1つとしているもので、歌謡や舞踏、演劇や話芸などが含まれると考える。また習得のために相当のコストがかかり、「芸」として一程度の水準を要求されるので、たとえば子供のお遊戯会などは含まれないであろう。プロにもなれる可能性があるもの、という言い方もできよう。つまりある種の水準を保つ必要がある。諸鈍のシバヤと与論の「方言劇」はその水準において十分に芸能であると考えられる。なぜこのような断りをするのかということは本論の中で詳しく触れるが、比較する対象が少ない「芸能」の水準をどう獲得して維持するかが地域の大きな課題になることが見えてきたからである。2つの例とも地域の住民によって支えられているが、それぞれの地域の現状が「バイタル」ともいえる部分で大きく異なり、当然ながらそれらは演劇・芸能のあり方に投影されている。

本稿は継続的な調査の経過報告であるとした上で、明らかにすべきことは以下のようなものだと考えている。

- ・芸能・演劇の継承、伝承とことばは結び付けられているのか。
- ・「伝統」は地域文化の伝承のモチベーションとして機能しているのか。
- ・地域社会の外からの働きかけは文化伝承に有効か。

この2つの事例を並べて論ずることの意味を改めて考えたい。

まず与論と加計呂麻・諸鈍は奄美群島に位置する。同じ琉球語圏ではあるがその歴史・社会的背景は沖縄と大きく異なる。400年前の薩摩侵攻にだけその理由を求めるのではなく特に近代以降の歴史的な流れと奄美人の意識（あるいは沖縄の側にも）のある種の「乖離」と、行政的に鹿児島支配が続いていることで言語・文化のおかれる現況は沖縄（県域）と違うことは奄美群島を分けて考える理由になるだろう。

そしてこの2つの地点で扱う演劇は全く違っても言える。「諸鈍シバヤ」は伝統芸能とされ、800年前に起源が求められると謳っている¹。これはもちろん伝説でしかなく検証する方法はない。ここで重要なのは「古く」「伝統がある」と意識されていることだ。よくある平家の落人伝説と繋げても、少なくとも地域社会では異論が出ないほど意識されているということである。E. ホブズボームが指摘するように「伝統は作られる」²のではあるが、だからと言って価値がないと言おうとしているのではない。相当の裏付け、そして何よりも時間の経過がなけれ

¹ 新聞記事なども含めほぼ全てのシバヤについての記述がこれで始まっている。

² エリック・ホブズボーム、テレンス・レンジャー『創られた伝統』紀伊國屋書店、1983

ば認められないであろう。伝説を検証できないのはともかくとして、記録の残る限りでも諸鈍シバヤは長きにわたって続いている。しかし「記録に残る限りでは」初めての中止を2017, 2018の2年にわたって経験した。一方の与論の「方言劇」は2017-18年の二回公演されたもので、新しい取り組みである。前田(2019)³で言及したように継続させることが大きな課題の1つだった。だが2019年は文化庁の補助金申請が通らず公演が叶わなかった。伝統、あるいは歴史という意味では両極端な2つの事例であるが奄美群島内では数少ない「方言」を取り扱う芸能の事例であることからそれぞれの事例の個別の報告と、そこから見えてくる伝承の装置としての共通した課題、問題などを扱ってきた。

本報告では偶然にも2つの事例が経験した「中断」を軸に地域社会の、特にそれぞれに深く関わった人々への聞き取りを記録し、上述の3つの視点を中心に分析を試みる。

1. 諸鈍シバヤと諸鈍集落

本節では奄美大島の付属島嶼とされる加計呂麻島に位置する諸鈍集落で長年続いている

「シバヤ」をめぐる近年の状況、特に2017, 18年の台風による中止について人々の語りから構成することを試みる。

1-1 諸鈍シバヤ

これまでも本研究でも何度か触れてきたが、本稿に合わせ改めてシバヤについて概括する。シバヤは毎年旧暦の9月9日に加計呂麻島、諸鈍の「大屯（おうちゃん）神社」で行われる。シバヤが演劇であるかについてであるが、音楽劇、野外劇とされている。さらに琉球列島全域にある八月踊り、豊年祭の演しものではないことが挙げられているが⁴、現在は11の演目が上演されている。紙の面（かびぢら）をつけた仮面劇と言われることもあるが、演じられる演目はかつての半分程度になっている。既述のように起源ははっきりしていない。かつては群島内を商業目的で巡業した記録もあり、1976年に国指定無形文化財になってからは何度か⁵島外で公演も行なっている。

諸鈍は現在も加計呂麻島最大の集落である。しかし加計呂麻島、あるいは瀬戸内町全体での傾向であるが、人口減は止まらない。2004年に233人だった人口が2019年には173人になっている⁶。近年の人口減少のペースは特に早い、分母が小さくなったところへの人口流出のためにより実感するところが大きい。原因としてはかつての人口流出は若年層のものであったが、近年は残された老年層の死亡、もしくは転出が見られる。加計呂麻には33の集落があるが、そのどれもが過疎化しており特に医療、介護、教育の面で困難があり、それらがさらに人口減少を加速させていると思われる。加計呂麻は周囲150km、面積はおおよそ77平方kmの島であり、公共交通機関も奄美大島側と繋ぐフェリーにあわせて運行されるバスが一日数便あるだけである。島内の中学を1つにまとめる計画が持ち上がったが、特に諸鈍集落の強い反対で流れた。集落から学校を失うことが受け入れられなかったからである。美しい砂浜やデイゴ並木な

³ 前田達朗(2019) 「与論島「方言劇」～地域社会への影響」

⁴ 瀬戸内町図書館 <http://www.setouchi-lib.jp/assets/j5.html>

⁵ 最後の島外公演は2004年である。

https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/plays/view_detail?division=plays&class=min_geinou&type=series&lstart=all&sid=61&trace=detail&did=1400095

⁶ 瀬戸内町ホームページによる

http://www.town.setouchi.lg.jp/koseki/cho/chosei/jinkou/jinkousetai_2019.html

ど観光客が目指す美しい景観や、琉球王朝とのつながりも含め加計呂麻の中心地を自負し続けてきた集落のプライドは、今なお強い。

そのプライドを支えてきたもう1つのものがシバヤである。「芝居」の転訛だとされることもあるが、演じられる際に拵えられる小屋のことを呼んだものだとされている。諸鈍出身者の男性でなければ在住者でも参加できないのが「諸鈍シバヤ保存会」である。18名のコアメンバーと9名のサポートメンバーで構成されている。既述のように国指定文化財であるため年間7万円の予算が下りるが、仮面や衣装の補修などに消えていく。従って公演に伴って報酬などが発生するわけではない。前田(2018)⁷でも触れたが、2017年に長年「唄者」と呼ばれるいわばリード・シンガーを勤めた人物が死去し大きな打撃を受けたが、新メンバーで公演ができるまでの練習を積み上げた、そしてそこへ台風が直撃し「少なくとも戦後初めての」中止となった。2018年も同様の理由で中止となった。

保存会の中ではシバヤはいつの頃からか「神事」であるとの意識が強いのだが、既述のようにかつては商業目的でもあった。「神事」であることを理由に旧9月9日以外の上演を断っている⁸。このある種の思い込みは、神社の境内で行なっているということに起因していると思われる。しかしかつては集落の広場で行われていたものが、神社に場所を移した記録が残っており、そもそも神事であったと言う証拠にはならない。また「神社」も他の琉球列島地域と同様に明治以降に土着の宗教の施設が神社へと転用されたものである。

「神事であるから他では上演できない」と言うのは、文字通り保存会の「体力」の問題であると考えられる。メンバーの高齢化や個人にかかる負担もあわせ年に一度の上演が限界だと言うのが本当のところだと思われる。

1-2 二度の中止

本節では2017年と2018年の上演の中止をめぐる関係者の「語り」から、その前後の集落の人々の様子を再構築しようとする。以下は2019年のシバヤについて伝える奄美新聞の記事である。

「本来の形」に 瀬戸内町諸鈍

「クガツクンチ」(旧暦の9月9日)の7日、瀬戸内町加計呂麻島・諸鈍集落の大屯＝おおちゃん＝神社で国指定の重要無形民俗文化財「諸鈍シバヤ」があった。昨年、一昨年と台風により中止となったため、今回が実に3年ぶり。見物に訪れた大勢の観客の前で紙面をつけた集落の男衆、諸鈍小中学校の子ども達、計25人がコミカルな動きの劇などを繰り広げ、笑いを誘った。「諸鈍シバヤ」は1185年の壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平資盛＝すけもり＝一行が、島人と交流を深めるために伝えたのが始まりと伝えられる。一時期途絶えた期間があったものの1914年に復活し、76年に国指定の重要無形民俗文化財に登録された。かつて20種目余りあったという演目は、即興的狂言、人形劇を含めて現在11種目が伝承・保存されている。2017年には台風接近により初めての中止に。翌18年は行事前に接近した台風24号により集落内に砂が吹き上がり、浸水被害がある家屋も出たことなどから、2年連

⁷ 前田達朗(2018)「与論「方言劇」」

⁸ 2015年「国民文化祭」での瀬戸内町古仁屋での公演が最後の諸鈍以外での公演である。

続の中止を余儀なくされていた。今回は行事を「本来の形」に近づけるために、アナウンスでの劇内容などの紹介・説明を省略。諸鈍シバヤ保存会の吉川久也会長(48)は「本来の諸鈍シバヤに戻していきたい」とした一方、「今後は継承のために(同小)校区内の近隣集落に声を掛けて協力を仰ぐ必要もあると思う」とも話した。演者らがホラ貝やハトを鳴らし、踊りながらの「ガクヤ(楽屋)入り」で第1部はスタート。同小中の児童生徒も「キンコウ節」などに参加した。「スクテングワ」では演者が2列に並び、両端に飾りをつけた棒を激しく打ち合い、飾りがひらひらと舞う姿に観客らが見入った。第2部はイノシシとの格闘を模した「シシキリ」で幕開け。かまを持って踊る「カマ踊り」や人形劇「タマティユ」など多彩な演目にユーモアな動きが加わり、会場の笑いを誘っていた。吉川会長は「行事は集落にとってなくてはならないもの。(中止になっていた)2年間で先代の唄者がなくなるなど存続も厳しい状況だった。子ども達にもいろいろと協力してもらって、本番を迎えることができて良かった」と語った。

(奄美新聞 2019年10月7日、強調筆者)⁹

この記事にはいくつか本節で問題にしようとしているものが含まれている。「中止の判断」「他集落との連携」「本来の姿」「唄者の交代」「存続の危機」「子どもの参加」などである。以下複数名へのインタビューを基に構成するが、回答者の情報は一切記さないこととする。その理由は言うまでもないことかもしれないが、小さな地域社会のため誰が話したかで、禍根が残る可能性が非常に高いからである。匿名を条件に話をしてもらった人もいる。そのため属性がわからない形で「 」をつけて引用するが、その中に間違いがあったとしたら全て筆者の責任である。「事情を知る人々」と言うことしか言えない。何度か繰り返しているが、2017年の中止は大きな衝撃であった。そもそも旧暦の9月9日あたりは台風の多いシーズンであり、これまでも上演が危ぶまれたことはあったが、記録上初めての中止と言う判断に至った。シバヤのもう1つの姿は観光資源としてのそれである。これを目当てに観光客も来るようになり、例年盛況である。けして広くない神社の境内は人で溢れかえる。この時ばかりは普段は人気のない諸鈍も活気を取り戻し、集落の人々はかつての姿を思い描くことができる。瀬戸内町行政も大いに期待、利用をしているのだが「集落の行事だから」とコミットすることはしない。臨時のものを除いて予算措置も特にされていない。中止を巡っては保存会の中でも議論があったが、町営のフェリーの欠航が決まったことと台風の勢力が強かったことを理由に中止が決定された。しかし、別の「迷い」もあった。同年5月に長年¹⁰唄者を勤めたU氏が逝去する。集落のダメージは大きかった。保存会は当然新体制を組んで、例年以上に練習に打ち込んだが、「不安もあり、(中止に)正直ほっとした部分もあった」。この「旧暦の9月9日でなければいけない」と言う縛りは「伝統」の一部であろう。土日や休日に合わせることなく続いてきた伝統は日程を変えて上演することが許されない。「日程を変更しようと言う話にはならなかった」。保存会の人々は一年をかけて準備している。それぞれの演目を演じようとするとなんかの練習がいる。シバヤが続いてきたのは、もちろん芸能としてのレベルが高いからである。「昔から練習は厳しく、年配の人の要求は高い」と言われる。そこまでしても中止にする、と言う判断

⁹ <http://amamishimbun.co.jp/2019/10/07/20883/> 同日の「南海日日」では「奉納」とされていた

¹⁰ 一説には30年と言うものが聞かれたが、正確な記録がないとのことだった。

がされたのであった。新聞記事の中にもあるように「唄者の交代」があったことが 17 年の中止に影響がなかったとは言えないのではなかろうか。「中止と聞いた時に、台風よりもそっちなかなと思った」と言う話も聞いた。保存会会長が「存続の危機」とコメントしているが、危機感については「いろいろだった」、と言うように保存会の中でも意見や意識が分かれていたことがわかる。「あつて当たり前」のシバヤを続けなければならないと言う義務感とでも言うべきものもまた「伝統」なのであろう。2 年目の中止の判断は台風の通過後でもあったことから「いよいよダメかと思った」と感じた人もいた。集落の被害は確かにあったが、繰り返すが台風の影響はあるものとして人々は生活している。そのように捉えられても仕方がないところではあるが、保存会の中でも激しい議論があったと言う。その中で持ち上がったのが「諸鈍以外の集落からの参加」である。これまでも「例外的に」中学生までは諸鈍以外の子供も参加が認められていた。排他的だとの批判ももちろんあったが、特に高齢者の中には抵抗があった。少なくとも 5 年前には「大きな声では言えないこと」であった存続の危機を感じたからこそ保存会の会長という立場で公にコメントが出る、と言うところまで来たのだと考えられる。

「子どもシバヤ」¹¹と呼ばれるものがある。保育園や幼稚園あるいは小学生がいわば真似をする。これについては拙くとも、どこに住んでいても、あるいはどこから来ても「許される」。しかしこれもまた子どもにさせていることで「続いている」という錯覚に過ぎず、その後全く繋がっていなかった。諸鈍の子どもがその中にいなければ、その後本物のシバヤに参加することはできず、文化伝承でもなんでもなくただのお遊戯に過ぎない。また近年はメンバーの不足も相まってシバヤの本番に中学生や小学校高学年の児童が特定の演目に登場するが、これも中学生までであつてそれ以降は諸鈍小学校の校区住民でも諸鈍出身者でなければ参加できない。シマグチの伝承活動にも言えることだが、「子どもへの依存」と「集落のプライド」が伝承活動の途絶という結果を招いたのは間違いない。受け手とされる子どもの不在に結論づけられているが、実は伝承が必要だったのは子供達だけではなかった。諸鈍に限らず「お年寄りに昔のことを習う子どもたち」というストーリーが美化されているが、「効果」という意味では限定的であった。彼らはやがて間違いなくシマを離れ、多くは戻らない。集落の行事や生活を支える世代はシマグチを知らないままであった。そしていまその受け手がいなくなり以前のような伝承活動は途絶している。

加計呂麻島の他の集落では、豊年祭の時にシバヤの「楽屋入り」と同じ曲、同じリズムで練り歩く際に「諸鈍の真似をする」と言う歌詞がある。また対岸の大島側の油井集落には「豊年踊り」と呼ばれる、同様に仮面をつけ一部シバヤとほぼ同じものが存在する¹²。別のものと考えるか、模倣とするかはともかく、シバヤの影響力と「権威」はそこここに残る。それが揺らいだと考えるのか、時代の変化と考えるのかはともかく、「伝統」は頑なである必要があり、それ故に伝えられたものもあるが、支える力も必要であった。その力が今の諸鈍集落にあるのかが問われ、人々は変化を受け入れようとしているように見えるのである。

ただ「やめてしまおう、という話は一度も出ませんでした。しんどいな、という言葉はあり

¹¹ 例えば次の記事のような「おめでたい」が「血や伝統」が強調されるような表現がされることも多い

<http://www.nankainn.com/culture/%E5%9C%92%E5%85%90%E3%81%8C%E3%80%8C%E8%AB%B8%E9%88%8D%E3%82%B7%E3%83%90%E3%83%A4%E3%80%8D%E5%AE%8C%E3%82%B3%E3%83%94>

¹² <http://www.setouchi-bunkaisan.com/time/100>

ましたが。シバヤがなくなることは想像できなかつたです」というように、2年連続の中止を乗り越えたのもまた伝統の力である。ただ2年のブランクは歌や踊りを含む演技のレベルの低下も心配された。「以前と変わらない素晴らしいものであった」という評価も比較が難しかったであろう。激しい動きをとまなうシバヤにメンバーの高齢化は確実に効いてくる。

また「本来の姿に戻す」というのは、観光コンテンツ化を目指した、つまりはシマグチを理解しない観客のために行われていた日本語による解説をやめるということであった。「間が空きすぎていた」と進行上あるいは演出上も邪魔だと考えられていたようだが「シマグチの空気がダメになる感じがした」とのコメントもあった。前田(2017)で触れたように「口上」と呼ばれる劇への導入も日本語になってしまっていたように、歌の歌詞以外はシマグチが存在感を失っていた。

2000年代初頭、「シマグチ」伝承運動が盛んだった頃、諸鈍は「こどもたちのシマグチがうまい」と言われていた。コンテストなどでも他の集落を寄せ付けぬ強さで、それも集落のプライドを支えた。もちろん大人たちの間にもあったのだが、中学生や小学生の中にも「シバヤに出たい」といういわばポジション争いがあり、その中でシマグチも要求され、磨かれていった。コミュニティにバイタルがあったその頃に戻れる可能性は極めて少ないが、諸鈍だけでなく加計呂麻全体で、あるいは移住者なども排除しないコミュニティの再構築がかなえば、現状を打破できる可能性はあると考える。

2 与論「方言劇」の中断と人々の反応

前田(2019)¹³で明らかにしたように、2017、18年の二度にわたって行われた「方言劇」の活動は地域社会に大きなインパクトを与えた。しかし文化庁の助成金が原資であり、ある程度予想もされていたが3年連続の助成はかなわなかったため、結果途絶することとなった。このことが地域社会に落とした影と人々の反応を見ることが本稿の主な目的となる。

2-1 これまでの「方言劇」「もう一つのあじにっちえ（按司根津栄）伝説」と「空亡」

2017年の初回の「方言劇」のタイトルと2018年の2回目のものである。按司根津栄の伝説は15世紀の北山王朝による与論侵攻に一人立ち向かい琉球軍を一度は押し戻したという英雄伝説をモチーフに、SETの坂田鉄平の脚本、白土直子の演出によって制作・上演された¹⁴。SETはこうした都市部以外での地域住民と演劇を作る活動の実績があり、その点も採択の材料になったと考えられる。白土も経験は豊富で、演劇経験のない人々を集め短い時間で仕上げるという困難な作業ができる演出家、舞台監督といえる。脚本は書き下ろしで台詞のうち「方言」の部分は主に今の与論の若者たちがタイムスリップしたときの「昔の人」が話す言葉であった。その他は琉球の侵略軍も含め東京語を話していた。沖縄から音響と照明のスタッフ、劇団のプロの俳優が一名助演という形で参加し、白土の不在時には演技指導も行った。およそ三ヶ月という準備期間であったが、この条件の中では完成度の高いものであり、与論の人々へのインパクトは大きかった。この劇をきっかけに特に子どもたちが伝説の人物に興味をもち、祀られている場所や集落を訪ね、小学校の授業としても取り上げられるなどの想像していなかった効果

¹³ 前田達朗(2019)

¹⁴ 前田達朗(2018)

があったという。

その「実績」を受けての二回目、二作目の「空亡」（くうぼう）は脚本のコンペが行われ、応募作のうち末吉功治の作品が選ばれた。末吉は沖縄の劇団 TEAM SPOT JUMBLE (TSJ) の所属であり、沖縄で制作され全国的に知られることとなった戦隊もの「琉神マブヤー」¹⁵の重要なキャラクター「龍神ガナシー」役として人気の現役俳優である。与論でも子どもたちはマブヤーとガナシーを知っていた。TSJ もまた SET を主宰する三宅裕司の発案で 2005 年沖縄を地盤に活動を行う劇団として立ち上げられたものである。末吉自身東京での生活経験があり「ことばについて辛い思いをしたし、シマの言葉には思い入れがある」とのことであった。人々の意識は変わりはじめ、新しい動きや見直しも始まっている。とらえ直されているいちばん大きな物はもちろん「方言」である。演劇を続けたいと考えることは「方言」を考えることである。人々がこれまでの二回の公演を到達点と考えていないのは演劇としての完成度だけでなく「方言」で劇をするという目標が形になって見えてきたからであろう。また観客、地域の人々の反応も好評で、3 回目がかなわなかったことについて残念がる声が多く聞かれた。

与論というコミュニティと演劇という手法はこれまでのところうまく合っているように見える。コミュニティの紐帯、若い世代と移住者の存在感、沖縄との距離などがうまく作用していると考えられる。そしてなによりこのサイズのコミュニティであるにも関わらずじつに多くの才能が与論にはあると感じさせられた。

2-2 中断への反応と新しい演劇活動

地元でもある程度予想されていたが、2019 年度の文化庁の助成金の不採択は「方言劇」活動を途絶させた。この助成制度はいわば「両刃の剣」ともいえる。あえてネガティブな面から見ると、地域の人々だけではすぐには作れないレベルのものを経験できる、ということは外からの力に頼らなければなにもできないということを経験することでもある。「劇団を作りたい」「自分たちの力だけで作る体制を整えたい」と上演後の演者を中心とした人々へのインタビューでの答えがあったが、それらが整うまでには至らなかった。したがって今年度はこれまでのものと直接つながる活動は見られなかった。最大の課題としてあげられていたのは脚本をはじめとする制作側の技術をどのように獲得するか、であった。演じることへの自信を獲得した多くの人々がいたが、一方でそれは与えられたものであることも理解されていた。もちろん資金の調達や規模も問題となってくる。この先にも助成が獲得できる可能性は十分あるが、今回の途絶は想像以上に早い「現実」であったというのが地域の戸惑いにも似た反応だった。方言継承に効果的だという手応えがあっただけに残念だが、自分たちでできる方法を探す必要がある、というのが複数の人々に共通した見解であった。そしてリーダーの不在を問題としてあげる人も多く、人間関係の濃密な地域社会での難しさはあるだろう。それゆえ外部からの参加がやはり必要¹⁶だろう。

一方で別の演劇活動が与論で起こって活動が始まっている。「野生を編む島」という劇団が第一回の公演を 2019 年 10 月 11 日に公演を行なった。劇団を主宰する沖たかとし氏は与論出身で、東京在住時代に中野でアイヌと沖縄出身者を中心に行われる多文化を標榜した「チャラ

¹⁵ 2008 年から放送開始。マレーシアではリメイク版が制作され人気を博した

¹⁶ 前田達朗(2019)

ンケ祭」に関わっていた。2016年に与論島に戻り現在も在住である。東京での活動で知り合った演出家、小池博史¹⁷氏の手法である身体表現を中心とした演劇活動の与論からの発信を着想し、上演に至った。沖氏がめざすのは「与論を表現すること」だと言う。与論性、与論らしさとは何かということを追求したいと考えている。10月の公演には「方言劇」に出演し中心的な役割を果たしたメンバーが2人いる。「方言劇」の存在は知っていて、公演も見たが自身の活動と直接の関係はないと考えている。しかし「（与論）を表現しようとしたら、「方言」を使いたい」と考えている。脚本や演出について勉強をして、自分で作り上げたいとも考えている。

5000人程度のコミュニティである与論町だが興味や才能をもった人材が多く、統計には現れないバイタルの高さが見える。（たとえば諸鈍集落がある瀬戸内町は高齢化率が35%、与論町は31%ほどで有意な差があるとは考えにくい）。「野生を編む島」の公演も150名程度の観客を集め、会場は満席であった。特定に人々だけでなく一般の関心も高いと言える。

演劇が効果的な手段であることは特に直接関わった人々には、強く感じられている。「身の丈にあった」方法が模索され始めていた。距離の取り方に困っていた行政も状況は把握していた。距離の近いコミュニティゆえであろうが「まずは町民主体の活動が立ち上がって、それを助成していくというのが健全な姿だろう」というのは、与論町の文化事業の責任者である教育長の弁である。

おわりに

諸鈍で見られたのは、繰り返しになるが「伝統」の2つの側面であった。あるいは「伝統芸能」と呼ばれるものに共通していると思われるが、様々な「縛り」があり、それ故に変わる、あるいは変えることは躊躇われて結局は前例を踏襲すること以外のことできない。もちろんその「縛り」がルールとして機能するだけの力が集落にあった頃には意味があったかも知れない。既述のように2000年代初頭のシマグチ伝承活動が盛んな頃にはシバヤの存在こそが諸鈍の人々のプライドとシマグチの能力を支えていた。しかしいわば縮小再生産しかできない集落の現況には負の効果をもたらしているようにも見える。その顕著なものは、諸鈍集落出身者以外はシバヤに関われないと言うものだろう。だが一方で2年のブランクを経てもなおシバヤを開催できたのは、いろいろな選択、例えば規模の縮小ややめてしまうことも含めた見直しを押し留めた。存在することが当たり前でそのことを疑わないのも、やはり「伝統」の力であろう。伝承すると言う選択は今の集落には相当の負担であるが、構成員の誰もがそれを言わずに「復活」と言ってもいいシバヤの再演にこぎつけたのは、強制力とまで言うところ集落の人々には抵抗があるだろうが、大きな力が働いていることは間違いがない。

与論の「方言劇」の中断が人々に惜しまれていることと諸鈍シバヤを復活させたものは同じなのだろうか。もちろん現時点では答えは出ないが、与論の人々もまた「伝統」を欲しがっている。固有の芸能に乏しいことには既に何度か触れたが、助成がいつまでも続くものではないということも分かりながらも、続いてほしいと望んでいたことからわかるように、継続することに地域社会が安心感を持てるのは間違いがない。これまでにないインパクトが地域社会にあり、人々の気持ちは確かに動いた。そして「縛り」がないことは、いま様々な動きにも繋がって

¹⁷ 小池 博史；演出家・作家・振付家。TVディレクターを経て1982年パフォーマンスアーツグループ『パパ・タラフマラ』を設立。代表作に「パレード」「SHIP IN A VIEW」「三人姉妹」等

る。そしてその動きの中にいる人々はユンヌフットゥバの意義をそこに見出そうとしている。それができるのは与論ではユンヌフットゥバへの危機感もあるが話者もいることから、希望が持てるからだこの調査を通じて見えてきた。コミュニティのサイズは大きく異なり、「与論」と言うくくりも適当かどうかは疑問であるが、諸鈍集落が失った言葉のバイタルがまだあると感じられることで生産性を持つことが見込める。

奄美群島と沖縄の違いはここにあると考える。石原(2018, 2019)の報告にもあるように現代的な手法や題材を取り入れた演劇活動ができるのは、少なくとも沖縄の中南部の人口集中地域には、しま言葉を日常的に使う能力、新しいものに対応しさらに生み出す能力がある人的な資源がまだあるということである。

諸鈍の事例は、厳しい言い方になるが、変わらないと生き残れないと言う随分と言い古されたことの典型例であろう。ただ「継承」と言う視点からいくと言語にせよ、あるいは文化全体にせよ変わらないことに意味を我々は見出している。人間の精神活動の総体を文化と呼ぶとすると、変化は自然なことで、それを受け入れないようにするために費やされる様々な努力が必要なのは当事者以外も考えなければならないことだろう。伝統は確かに伝承のモチーフでもあった。変わらないことから得られる「安心感」は確かに存在する。必要なものかもしれない。しかしそれを維持することに耐えられる体力がコミュニティにあるかどうか、さらにそれ故に失うものがあるかもしれないことに気付けるのは、内側にいる人ではないとこれまでの二地点の調査で強く感じる。諸鈍の「伝統」はさらに外部からの侵入を拒んでいる。集落の人口が減る中で苦しんでいるのは、与論の「方言劇」にたびんちゅ〜旅人と呼ばれる人々が活力を与えているのと実に対照的である。諸鈍の伝統は今重荷になっているのではなかろうか。外部からの力を借りることも現状を変える有効な手立てに見える。

与論の人々の様々な経験の積み重ねが将来的には「伝統」となる可能性はある。与論オリジナルの、沖縄のものでも奄美群島の他の島のものでもないものを見つけよう、作り上げようとしている。その場所への演劇の導入は実に効果的であった。人々は与論とは何かを問い直し、伝説やユンヌフットゥバをできるだけ盛り込み「与論性」を投影しようとした。わずか2回の実践であり、過去のもの、あるいは古いものの象徴であったのはユンヌフットゥバの現状を投影しているだけではなく、伝統や歴史、あるいは古さの中に正統性を感じ求めているからであろう。その模索が始まったばかりであり、外からの大きな力、この場合は助成金であるが、が途絶したのはやはり大きなダメージだった。現状では与論の人々だけの力での活動は限定的で、二回の「方言劇」が与えた影響ほどのものは得られていない。今後の経緯を引き続き見ていく必要があると考える。しかし与論も諸鈍も、中断が見直す機会になっていることが見られた。

演劇が、どのような形態や方法を取るにせよ、ストーリー性を持つと言う意味で言語は必要なツールであるし、地域のものであろうとすれば、地域言語は外せない。長く続くシバヤでも始まったばかりの与論の「方言劇」でもその「機能」は変わらない。シマの言葉を使うが故の様々なコストを理解してもなお、自分たちのものであるためには諸鈍のシマグチとユンヌフットゥバでなければならない。「伝統的」なもの始まったばかりのもの、双方で同じ役割を担っていることから、演劇、もしくは芸能はシマの言葉を次の世代に繋ぐものであると言えよう。それが目的ではなかったシバヤもともかくとして与論で芽生えつつある演劇活動でそのことは強く意識されている。作り上げるためには時間や労力を要するが、何よりも演じることの楽しさを経験者たちは強く語る。

また地元行政の関わり方もおよび腰の感を拭えない。諸鈍の瀬戸内町も「地域の宝」などと利用もしながら一方で「集落の行事」との理由で積極的な関わりをさけている。与論町にも「ある種の「戸惑い」があった。外部資金で行われる事業にどれだけコミットしていいかの距離感がつかめずにいた。その姿勢には町民からの批判もあった。また多額の助成を行う文化庁であるが、単年度だと地域の人々の準備の時間が乏しい。地域になにかを根付かせるためには一度や二度では難しいと考える。

参考文献

- 石原昌英 2018 『しまくとうば劇の効果について』（平成 29 年度）危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- 石原昌英 2019 『しまくとうば継承しまくとうば劇』 「平成 30 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」琉球大学島嶼地域学研究所
- エリック・ボブズボウム、テレンス・レンジャー 1983 『創られた伝統』紀伊國屋書店
- 前田達朗 2013 「経験としての『移民』とそのことば」『ことばと社会 12 号』三元社
- 前田達朗 2018 「与論『方言劇』」『（平成 27 年度）危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学島嶼地域学研究所
- 前田達朗 2019 「与論島『方言劇』地域社会へのインパクトと『旅人～たびんちゅ』の役割」 「平成 30 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」琉球大学島嶼地域学研究所